

# 第二次世界大戦直後の「近畿新教育実験 学校協会」の活動と成果 (3)

横 山 ひ ろ み

Activities and Results of the Kinki New Education  
Try-out School Association after the Second World War (3)

Hiromi YOKOYAMA

## 要 旨

第二次世界大戦直後の荒廃の中から、新しい教育の模索が始まったが、その先駆的理論と実践とを導いた教育機関の一つが、「近畿新教育実験学校協会」であった。本論文では、その実践と成果について考察する。

キーワード： KTSA, try-out school

## 第 5 章 KTSA の研究活動

### 1 研究協議会

昭和22年1月に発会したKTSAは、昭和22年度に会の活動の基礎を整え、昭和23年度から、「研究協議会」を定期的を開いて、共同で研究を深めていく。

最初の「研究協議会」は、6月11、12日に行われ、会場は奈良女子大附属小

学校であった。7月には六甲で合宿、10月には和歌山師範男子部附属小学校、12月には京都師範女子部附属小学校というように、会を運ぶ。

初会は次のように行われた。『学習研究』誌が報告している。<sup>1)</sup>

昭和23年6月11、12日には、KTSAの研究協議会が当校で催された。まず当校の昨年以来の研究運営経過報告（例の7主題について）<sup>2)</sup>に始まり、マクレラン博士の「小学校における実験計画」と題する講演、各校のカリキュラム研究中間報告等があり、活発な討議をもって終始した。

アンダーソン先生は折悪しく臨席してはいただけなかったが、マクレラン博士は、「実験学校としての研究運営のあり方」について適切な示唆を与えられ、市倉女史もまた「社会科の学習」につき有益な講演をされ、京大の下程先生も二日とも出席され、討議の中によき啓示をされるなど、得るところ多大であった。

各校の発表は次の題目の通り、カリキュラムメイキングの基礎的研究といった実のある発表であった。

- 1 本校における自治会の実際（京都市生祥校）
- 2 児童生活時間の調査（京都市桃蘭校）
- 3 本校における生活カリキュラムの構成方針（和歌山師範男子部附属校）
- 4 総合教育における学習問題について（京都師範女子部附属校）
- 5 本校におけるPTAの活動（大津市中央校）
- 6 カミニテの分析について（岸和田市城内校）
- 7 本校における実態調査とその反省（福井県惜陰校）
- 8 教育計画立案にあたって（奈良女子高等師範附属校）

昭和24年度までの研究協議会の一例を次に掲げる。<sup>3)</sup>

於 京都市立桃蘭小学校

主題 単元をどのように展開したか

研究発表

- 1 カリキュラム展開上の諸問題（神戸大学兵庫師範学校附属小学校）
- 2 単元展開において問題となる点（和歌山大学和歌山師範学校附属小学校）

- 3 四年単元「昔の岸和田の町」(大阪府岸和田市立城内小学校)
- 4 四年単元「初秋の夜空」(京都市立生祥小学校)
- 5 単元「大津市の上水道」をどのように展開したか(滋賀県大津市立中央小学校)
- 6 単元の展開について一手がかり，ねらい，配慮(奈良女子高等師範学校附属小学校)
- 7 学習単元の展開について(大阪市立常盤小学校)
- 8 単元の展開(京都学芸大学桃山附属小学校)

## 討議

指導 京都大学教授 下程勇吉先生

司会 大津市立中央小学校長 石川哲三氏

主なる討議問題

- a 単元学習における学習活動形態の分類統計は望ましいが，現場活動と間接活動との割合をどんなに考えるか，また統計の単位について研究せねばならない。
- b 単元展開の中に表れる模型の「お城作り」の如きは，平和日本建設の意味から如何なる新しい意味づけが必要であるか。
- c 生活の能力の系列おさえていく単元学習の工夫は，どんなところに要点があるのか。
- d 単元展開における教師の計画上，児童の学習活動とのずれは当然起こるものと予想されるが，その際，何れに重きをおいて学習指導をすすめていけばよいのであろうか。
- e プランの評価は，いつでも必要なことであるが，多きを求めず，深化徹底を期するように，漸次修正されていくものであろう。

このように，一ヶ年の間に，研究主題が，カリキュラム作成から，単元学習，その展開方法へと発展したことが分かる。

## 2 研究大会

KTSA は、定例の研究協議会の他に、次の二つの研究大会を催した。

1 新教育研究大講演会 昭和24年7月16日開催 アンダーソン先生の送別  
記念として開かれたものである。

2 全国教育大講演会 昭和26年7月2～5日開催

ここでは、2の会において討議された内容から一部を要約する。<sup>4)</sup>

参加者（順不同）

池田 進（京都市教育委員会事務局） 秋山羊一（京都府教育委員会事務局指導課長） 小野為三（京都市朱雀第六小学校長） 石川哲三（大津市中央小学校長） 広岡亮三（京都大学教授） 宇都宮（第一軍団民事部教育課） R・S・アンダーソン 不破 治（京都市教育委員会教育長） 重松鷹泰（奈良女高師附属小学校主事） 三輪和敏（兵庫師範男子部附属主事） 片岡仁志（京都高等学校長会会長） 下程勇吉（京都大学教授）＝議長

池田 「生活化」ということはよく分かるが、知識教育が不十分。訓育も。生活教育、インテグリッド、カリキュラムは、低学年にはよいが、高学年、特に中、高校では果たしてよいのか疑問。アメリカの多くのエッセンシャリストの言も聞くべきだ。教育の現実には、児童に安定感を与えようとしながら、かえって教育の不安定をもたらしているようだ。

小野 池田先生の言の通り学力は低下している。併し、学力低下の問題は、カリキュラムの罪ではないと思う。むしろカリキュラム外の原因が多い。昔のままの尺度で学力低下を言っていれば、その批判は問題だ。カリキュラムも、今は、「借キュラム」であって浮いている。地に着いたカリキュラムを実施したら学力は当然低下しないと思う。一面に於いて社会悪を克服しつつ、一面、地に着いたカリキュラム、奈良の先生のおっしゃっていた「納得のいくカリキュラム」を打ち立てたい。

三輪 学力低下の声はよく聞かされる。学力低下は、カリキュラム以外の罪で

あるとともに、カリキュラムの実践面、運営面の手落ちであろう。計画面において問題にされることが多かったが、単元展開の実際面に多くの問題があるようだ。これは別のことになるかもしれないが、カリキュラム論争が、いつも「昔のカリキュラム対、進歩的な生活カリキュラム」となるのはどうか。実際はその中間に、「生活中心のインテグレーションの原理に立った社会科の単元学習」が我々の課題である。社会科そのものの充実、作業単元の意味を生かした指導がおろそかになっているようだ。社会科をいかに充実するかを考えなければならない。

秋山 色々のお話を伺ったら、進歩的な学校の当事者が、「今や反省の段階に入っておられる」ことに心強いものを感じた。しかし一般の先生の全部が、果たして真摯な反省的な態度で児童を導いているかという問題だ。指導者自らの生活態度、パーソナリティが教育の上に大きな影響を及ぼす。私は新教育の指導者が、極端に言えば「子どもをかわいがる先生でありたい」と思う。

重松先生に伺いたい。「現在の社会科について考えなければならぬ問題がある」と思うが、重松先生は、先程の講演で「社会科について一言もふれない」ということはおかしい。このあたりで、「教育を混乱に陥れた社会科」について、先生のはっきりしたご意見を伺いたい。

石川 「新しいカリキュラム批判」には錯覚があるようだ。「新しいカリキュラムをやったから能力が低下したのではなく、敗戦によって日本の教育が一律に低下している」と思う。

いわゆる能力についても根本的に考え直さねばならないじゃないか。近頃の教材は、児童の現実の能力のシーケンスに添って低くなってきている。算数なんか特にそうである。しかしそれに反比例して、今日の児童の対社会的な知性、態度は非常に高まってきているではないか。新しい時代にふさわしい生活能力とは何かをもっと検討し、確定してから新カリキュラム批判に向かうべきだ。

廣岡 「能力低下の理由」として、第一にはカリキュラム以外の問題、第二に

カリキュラム自体の問題がある。単元自体の設定に問題がある。網の目が粗すぎ、小さな子どもの生活のニュアンスが逃されていたり、小さいところに捕らわれて大局を忘れたりする。また、展開がリアルでなく、観念的にも生活学習といいながら生活に直接的でないことが多い。こうした点をうまく考慮すれば立派に行くのではないか。その点で米国で行われた8年計画の実験結果は我々に参考になることが多い。

重松 社会科は立派な市民を作ることがねらいだ。新カリキュラムは社会科と同じ立場に立っている。単元学習のねらいは、子供に社会の理解と社会改善の機会を与えることだ。そうしたことが単元展開となるべきだ。しかし、単元展開で本当に子供たちが、社会に貢献する人になったか、また社会が良くなったか。それはお互いにまだ確信に至らない問題だ。

その前にもう一つ。我々はまだ単元の展開の結果としての評価をもっと突き詰めていきたい。それには、展開の記録の収集に努めねばなるまい。また、我々自身の社会への理解と貢献の態度をもっと向上させねばならないと思う。

今から約60年前の教育の転換期に、学力低下が問題となっている。「ゆとり」教育を批判している昨今はこれに通じると言えよう。「地に着いたカリキュラムを実践すれば、その心配はない」と小野は言う。重松は、「授業記録をとり、学習者の学び、授業展開の具体に迫って評価せよ」と言う。まさに「生活化」の教育と学力低下の関係について、厳しい討論が行われている。社会科の創設とともに、生活化と社会理解に重点を置いた教育を模索し始めたその研究会において、すでに学力低下が懸念されているのである。

これは、昨今の教育界の問題に通じるところがある。ゆとり教育の転換にともない、生きる力の育成、総合的学習の模索が始まった段階で、すでに学力低下が懸念され、文部科学大臣による「学びのすすめ」の公表、そして全国一斉学力テストの復活へと進んできた。それと時期を合わすように、2003年にOECD（経済協力開発機構）が世界41カ国の国・地域の15歳を対象に行った学

力到達度調査の結果が公表された。このテストは、知識や技能を実際の生活に応用する力を見るものである。今回の調査によると、「数学的応用力」（数学的リテラシー）が1位から6位に下がった。また、「読解力」（文章や図表から情報を読み取って考える力）は、8位から14位に下がり、前回に比べて24点の低下であり、調査国の中でもっとも大幅な低下であったという。自由記述式が苦手なことも明らかになった。また、テストと同時に行われたアンケート調査によると、日本の子どもは、「数学で学ぶ内容に興味がある」が33%、「将来つきたい仕事に役立ちそう」が49%で、OECDの平均よりはるかに低くなったという。「数学を日常生活にどう応用できるか考えている」と答えた生徒は、12.5%で、平均（53%）の4分の1以下の低さであった。文部科学省は、日本の学力は「世界のトップレベルとは言えない」という表現をはじめて使って、結果を厳しく受け止めているという。

しかしこの調査で示された学力は、いわゆる知識的な学力とは性格を異にしているのではないかと考えられる。それは単なる知識や計算力というより、数学や科学の応用力を問うものが主流になっている。読解力、考える力が問われる。このことから私は、知識的な「学力」と、実際に考え、応用する「生きる力」の両方の相互的な力の必要性を感じるのである。二つの力が適度に伸ばされることによって、知識や技能を実際の生活に応用する力がつき、ある程度の能力に到達するのではないだろうか。本稿の序論において、私はいわゆる「学力」も、「生きる力」も車の両輪のごとく必要なものであると述べた。<sup>5)</sup>そしてその二つの力のバランスは子ども一人ひとりによって違ってよいのではないかと考える。「学力」についての最低基準を定めた上で、子どもの個性や能力に応じて、「生きる力」に、あるいは「学力」のほうに重心を置くのである。個性に合った力を伸ばすことができた子どもは、自分らしく、自信を持って人間としての総合的な力を高めることができるのではないであろうか。個々の能力に合わせて自己開発できる教育が、結果的に国家の発展にも結びつくのではないかと考えるのである。

### 3 機関誌『実験学校』

KTSA は、『実験学校』という研究発表誌を、年間1冊発行することにした。第1集は昭和22年に大津市立中央小学校が編集を担当した。この号に、「近畿新教育実験学校資格基準」と、同「査定基準」も掲げた。<sup>6)</sup>第2集の編集は京都学芸大学附属桃山小学校、第3集はまた中央小学校が編集している。

次に記すのは、第2集と第3集の目次である。第2集は、戦後新教育の創生期から充実期に当たる、最も重要な活動を示す時期である。表紙と目次欄を掲げる。

#### 1 『実験学校』第2集目次

表紙

THE KINKI NEW EDUCATION TRY-OUT SCHOOL

実験学校 第2集 1949 アンダーソン先生送別記念特集号

カリキュラムの実践 生活能力の究明

大津市中央小学校 京都市生祥小学校 京都市桃藺小学校 京都学芸大学桃山附属小学校 岸和田市城内小学校 奈良女子大学附属小学校 和歌山大学附属小学校 神戸大学附属小学校 近畿新教育実験学校協会編

目次

巻頭言—生活教育についての断想 近畿新教育実験学校協会顧問 京都大学教授・文博 下程勇吉

高価な真珠 近畿地方民事部教育課長 ラングレー<sup>7)</sup>

研究報告

生活カリキュラムの実験経過 京都市桃藺小学校

「生活の場」を中心として 和歌山大学附属小学校

わが校カリキュラムの反省と前進 神戸大学附属小学校

新しいカリキュラムに於ける能力指導の問題 大津市中央小学校

生祥プラン構成の立場と基礎学習の実際 京都市生祥小学校

うたう子供 京都学芸大学桃山附属小学校

遊びと体育の制作 大阪市常盤小学校



訓育について 岸和田市城内小学校

国際アルバムを作ってアメリカへ送る 奈良女子大学附属小学校

生活能力に対する各校の見解—本学カリキュラムに於ける単元学習と基礎技能の練習の関係— 大津中央小学校

生祥プランに於ける能力の究明と実践 京都市生祥小学校

社会生活に必要な能力 大阪市常盤小学校

能力について 岸和田市城内小学校

基礎系列の組織化 神戸大学附属小学校

生活能力の究明 和歌山大学附属小学校

アンダーソン先生送別記念講演大会記録

実験学校研究結果報告—山田義信

教育における常識—ハクー・P・マーク

生活教育の根本問題—下程勇吉

教育計画について—重松鷹泰

回顧と展望—ローナルド・エス・アンダーソン

パネルディスカッション

「新カリキュラムの諸問題」

各校研究概要 和歌山大附属小 京都生祥小 岸和田城内小 大津中央小  
奈良女子大附属小 神戸大附属小

## 2 『実験学校』第3集目次

表紙

THE KINKI NEW EDUCATION TRY-OUT SCHOOL

実験学校 第3集 1950

特集—単元の展開, KTSA 資格基準と査定基準

京都市立生祥小学校 京都市立桃薫小学校 京都学芸大学桃山附属小学校

大阪市立常盤小学校 大阪府岸和田市立城内小学校 神戸大学兵庫師範学校

住吉附属小学校 奈良女子大学奈良女子高等師範学校附属小学校 和歌山大学  
和歌山師範学校附属小学校 滋賀県大津市立中央小学校

## 目次

優秀な教師の使命と教授法 近畿民事部教育課長 ロレンゾ・ディ・ラン  
グレー

単元学習・対人関係・責任感 近畿新教育実験学校協会顧問 京大教授 下  
程勇吉

## 実践報告 単元の展開

1 年単元の展開 (具体例 「お月見」など) 京都学芸大学桃山附属小学校

2 年単元 「お百姓さん」 滋賀県大津市立中央小学校

3 年単元 「買い物遊び」 神戸大学兵庫師範学校附属住吉小学校

4 年単元 「子ども郵便局」展開の実際 京都市立桃蘭小学校

「人間のすみか」展開案 和歌山大学和歌山師範学校附属小学校

「八十周年のお祝い」京都市立生祥小学校

5 年単元 「健康な生活」 大阪市立常盤小学校

「蚊帳」 奈良女子大学奈良女子高等師範学校附属小学校

6 年単元 「わが国と関係の深い国々」 大阪府岸和田市立城内小学校

各校 最近の研究方向 京都市立生祥小学校 京都市立桃蘭小学校 京都学  
芸大学桃山附属小学校 大阪市立常盤小学校 大阪府岸和田市立城内小  
学校 神戸大学附属小学校 奈良女子大学附属小学校 和歌山大学附属  
小学校 滋賀県大津市立中央小学校

近畿各府県の教育 京都府 大阪府 兵庫県 和歌山県 滋賀県

近畿新教育実験学校案内 学校名 児童総数 学級数 最近の研究報告書等

## 3 各校の学習の姿

『実験学校』第3集の巻頭グラビア2ページ分は、協会各校の授業実践風景  
を写真で示し、説明文を加えている。この写真で、児童が自ら生き生きと活動

している様子がよく理解される。どの授業も、体験的作業活動、グループ活動、表現活動をしている。指導者である教師の姿が表に出ていない。新設の社会科の実践、コア・カリキュラムによる実践が目指されていることが知られる。各校による写真と説明。( )は筆者のコメント

### 1年単元 「家庭」－大阪府岸和田市立城内小学校

楽しい家庭、明るい一日を家族そろってハイキングに。とある町角にシグナルがとまり、交通整理がされている。

写真－（交通信号、レールなどをグループで作成し、踏切のごっこ活動に入る準備をしている。どの児童もグループで真剣に話し合いながら作業をしている。一児は線路のそばで信号機のまねをしている。）

### 2年単元 「お百姓さん」－滋賀県大津市立中央小学校

お百姓さんから届いたお米をせっせと配給する。

写真－（屋外、校舎のそばに長い台が置かれ、壁に「にこにこはいきゅうしょ」の掲示がある。4人の係の人が、配給を受けに来た人の券を確かめている。

リヤカーに荷が積んである。どの児童も真剣なまなざしである。）

### 3年単元 「買い物遊び」－神戸大学兵庫師範学校住吉附属小学校

いも堀り－紅潮した顔、顔、顔、宝物でも掘り出すような子供たちの歓喜のひととき。

写真－（学校園、学級園に栽培していたさつまいもが実った。学級総出でいも堀りをしている。よく実った芋がころころと出て、みんな大喜びしている。）

### 3年単元 「伏見の町」－京都学芸大学桃山附属小学校

私たちの住んでいる伏見の町の研究は、次々と子供の意欲と実践により新しい天地を開拓していきます。

写真－（農地で発掘調査をしている様子。3人グループで、地面を指先を使って調べている。みんな下を向いている。教師が立って子供の活動に注目している。）

### 3年単元 「お天気をしらべよう」－和歌山大学和歌山師範学校附属小学校

測候所を見学して帰校後、その模型を作って、よりよく測候所の機能を理解しようと工夫している。

写真－（細棒、ベニヤ板などで風力計、測候所の建物などを作成した。その周りを児童と教師が取り囲んで話し合っている。児童の一人が、風向計を指さして一心に説明している。）

#### 4, 5, 6 年「自由研究科学班」－「天体の研究」－大阪市立常盤小学校

澄み切った秋の夜空に輝く名月を観測する科学班、屋上に据えた望遠鏡を囲んでいろいろ月についての研究が行われる。

写真－（ススキ、オミナエシを飾った屋上に、手に手に自作のように思われる望遠鏡を持って名月に向かっている。4年生も上級生と仲良く月観察を楽しんでいる。）

#### 4 年単元 「創立八十周年のお祝い」－京都市立生祥小学校

写真－（創立八十周年の記念行事に当たり、学校の歴史を研究した児童の作品が展示された教室が紹介されている。年表には、歴代の校長のものと思われる似顔絵が添えてある。）

#### 5 年単元 「蚊帳」－奈良女子大学奈良女子高等師範学校附属小学校

写真－（蚊帳製造の模型作りをしている児童の様子。制作についての説明を書き込んでいるようである。観察記録をとっている教師の姿も見える。）

#### 6 年単元 「学校工場」－京都市立桃蘭小学校

幼稚園から注文を受け、流れ作業で「動く玩具」の製作中。

写真－（工作室で6年生が玩具製作をしている。大きな動力機械を教師が動かして、用材を細分して、児童を手伝っている。児童は、細かい作図をしたり、彫刻をしたりしている様子である。）

### 4 各校の研究内容概要報告

昭和24年10月『実験学校』第2集に、夏までの協会各校の研究概要を報告している。終戦以来どのように研究してきたかが分かる。各校は、新教育をどのような個性的な歩みで研究していくか、実験学校としてどのように工夫した研

究をしていくか、各校に共通した傾向、共同した研究が見られるか、研究はどのように発展し、深まりを見せていくかを探ることができる。

## 各校研究報告概要

### 1 和歌山大学附属小学校

本校最近の研究（昭和23年度）

研究主題「生活カリキュラムによる和師附プランの展開」10月 研究協議会開催

発表題目－和師附プラン構成の基礎としての実態調査，カリキュラム改造の実際，中心活動，基礎学習，クラブ活動のあり方，教育の全体計画等

出版物－和師附プラン（昭和24年度）

研究主題「和師附プランの充実－生活能力の究明」10月 研究協議会開催予定

発表題目－生活能力表作成の手順，各種生活能力の系統，新しき訓育等出版物

出版物－右研究をまとめて刊行予定

### 2 京都市生祥小学校

本年までの研究

- (イ) 新教育に立脚する児童自治会の研究（昨年11月に発表，研究物あり）
- (ロ) コア・カリキュラムの理論の研究とその構成
- (ハ) 単元学習の実際的研究
- (ニ) コースオブ・スタデーの内容的吟味，教育心理の研究

本年度の研究

- (イ) カリキュラムの改訂（7月までに）
- (ロ) 生活時間の科学研究
- (ハ) 知能測定の実際とその活動

- (ニ) 基礎能力の抽出とその分類
- (ホ) 健康教育の研究（明德校で発表した）
- (ヘ) 能力表の作成
- (ト) エバルエーションの問題
- (チ) 単元学習の実際的研究

### 3 大阪府岸和田市城内小学校

学校は生活の準備を与えるところではなくして、学校生活そのものが生活であり学習である。それ故カリキュラムは借りものでなく本当の社会の諸活動をもって構成されていなければならない。社会生活のいろいろな活動の概念だけを与えるのではなく、実際に参加することによって生活のあり方を学習し、具体的な知識を習得するところのファンクショナル・カリキュラムを構成したいと考え、昨年度前半期は社会科を中心としてカリキュラムの構成に取りかかり、困難にぶち当たった。第二次、第三次の修正をして、本年は精密な実践記録によって第四次修正を考えている。社会科を慎重に検討学習してよりよいカリキュラムへ漸進的にコアカリキュラムへ転じつつある。

### 大阪市常盤小学校

昭和21年4月から24年3月まで3年間、大阪府並びに大阪市体育研究指定校として実地研究を続けてきた。その間体育を教育の一環として考え、学校体育から家庭、さらに社会体育と発展さすことを目指してきた。

本年5月近畿新教育実験学校連盟に参加以来、社会科を中心とし、他の broad fields は、それを中心に展開するコア・カリキュラムの構成を目ざした。左記にその方法態度について概略を示すこととする。

- 1 教育目標の地方化—本校の教育目標設定
- 2 社会科の一般目標の要約
- 3 社会科の学年目標の総括と作業単元の基底との関係
- 4 学習単元の設定—発展の系列を考える

- 5 各教科の能力基準法の作成
- 6 児童の経験領域と発達段階の調査
- 7 実験記録による修正

#### 滋賀県大津市中央小学校

##### 「中央プランの実践と改造へ」

- 1 「実験学校」として発足した第一年目、すなわち昭和22年度における本校経営の焦点は、生活学習の徹底と学習環境の清新充実にあった。
- 2 第二年目の昭和23年度は、現在、実践中の中央プランを構成することが、われわれの最も大きな課題であった。この仕事の姿は、去る昭和24年3月に発表して、広く批判を仰いだ。次の書物は、本校教育運営の実際を知っていただく手がかりとなるものである。「中央プランー構成と展開。中央プランー1, 2, 3年学習補導プラン。中央プランー4, 5, 6年学習補導プラン。」
- 3 昭和24年度は、別稿の如く、本校児童の生活能力を根本的に再検討することによって、中央プランをよりよい方向に改造しようとしてつとめている。

#### 奈良女子大学附属小学校

##### 「本年の研究問題」

- 1 学校および家庭の形態がいかなる方向に変化するかについての研究ー特に経済九原則の実施による必然的な変容を究明する。
- 2 幼稚園教育と小学校教育との連続過程の研究ー就学前の社会的訓練が、小学校教育能力に及ぼす影響を、第一学年の一学級を同一幼稚園より入学したもののみを以て編成するものと、抽せんによる混合編成のものとの比較によって検討する。
- 3 児童の各種能力の発達系統の研究ー教育の目標としての各種能力の吟味およびその詳細な発展系統を究明し、更にその修練の具体的方法を考究する。その成果は、学習効果判定の具体的基準となし得る程度を期待する。

## 神戸大学附属小学校（住吉）

### 「研究概要」

- 1 生活単元学習における基礎的方向の充実を図り、生活の具体に即しつつも広い教養と人格を広げる広領域化の研究。
- 2 児童の興味と意欲に即した生活的な学習展開の工夫。
- 3 今日の訓育の課題の解決

以上は今年度1学期中に一応研究の完成を見、研究冊子「生活単元学習と基礎学習」を発行した。

次は2学期以降の研究課題である。

- 4 生活単元学習の実践研究を通して
  - (1) 基礎系列の再検討
  - (2) 資料単元の研究整理
- 5 児童個々に徹するガイダンスの研究と実践
  - (1) 調査、測定、記録の方法の研究と実践
  - (2) ガイダンスの各方面にわたる研究と実践、あるいは特異児童を捉えての指導の実践研究。

## 京都市桃蘭小学校

### 「研究報告」

#### 1 昭和22年度研究

カリキュラムの研究－昭和22年度一年間の実践記録をもととして、教科カリキュラムから、コアカリキュラムに転換。

#### 研究誌（研究報告）

- (1) 新教育における本校教育目標
- (2) 新教育の実践－カリキュラムの研究

#### 2 昭和24年度研究

- (1) カリキュラムの再構成－先年度カリキュラムの反省と、スクールコミュニティとカリキュラムの一体化をはかる。



- (2) 基礎能力系統表の作成
- (3) ガイダンスの方法—個人および校内外自治生活の補導に重点を置く。
- (4) 研究誌「改訂カリキュラム表」「基礎能力系統表」(付本校スコープシーケンス)「ガイダンスの方法」

## 第6章 協会校の府県内「実験学校」との連携

### 1 府県内「実験学校」の、府県による活動の差異

KTSA 協議会は、その開発した研究業績で、所属する自府県の民主教育開発を先導する使命を持っていた。自府県の軍政部と府県学務課とが連携して活動した。しかしその連携の仕方は、府県によって相当違いが見られた。数府県の状態を次に掲げる。<sup>8)</sup>

#### (1) 滋賀県

民主化教育を推進するのに、KTSA 創立から半年後の昭和22年2月、県学務課と滋賀師範主催、軍政部協賛で4日間の指導者講習をしたが、講師はヘファン博士を始め、アメリカ人がほとんどで、日本人はわずかであった。その際、奈良女子大学付属小学校の児童たちが討議法の実演を行った。滋賀県代表となった大津市立中央小学校は、同年7月に「実験学校の全貌」と題する発表会を開いた。参会者1800名。以降毎年発表会を続けていく。県の教育委員会が「実験学校」制を設け、郡、市で申し出た学校を活動させた。

#### (2) 京都府

京都府では「実験学校」の活動は特に活発であった。軍団の膝元で、協会校が3校あったことから分かる。昭和23年6月に、京都生祥小学校で「京都新教育実験学校協会」を設立した。委員長に、同校校長の志賀広吉が就任し、活動を広げた。この会は、「つねに KTSA と関連を持ち、府下の実情を考え、実情に即した問題を選び、研究を進め、その実践報告についても府下の各地で行い、府下全体のレベルが向上するように配慮する」という考えの下で活発に活動した。加盟に際しては、「本目的に賛同し、自主的に本協会加盟を希望し、加盟校の推せんによる」とした。発会の昭和23年には、府下18校が自主的に組

織して出発したが、この年内に30校に増え、2年後には720校に達した。この協会は、KTSAとともに次のような事業も企画、実施した。次のような報告がある。

本協会として特筆すべき事業は、昭和26年7月、全国の代表的な進歩的教育学者9名を煩わし、「全国新教育大講演会」を開催したことであった。

この開催の動機は、「全国各地に新教育の実践研究が盛んになるにつれて、一応新教育についての理論上の理解はできたかに見えるも、これが実践にあたっては幾多の疑問や難点が介在していて新教育の前途に不安があることに鑑み、この際教育に対し、あらゆる角度から根本的に厳正な検討を加えることが必要であることを痛感したので、この企てをした」のであった。

来会者実に千余名、盛会を極め所期の目的を達した快心の思い出を持つものである。

### (3) 大阪府

大阪府では、他府県のような協力学校はできていない。しかし、実験学校的性格を持っている指定学校や研究学校のようなものができ、それらの学校は独自の立場から研究や発表会を行ってきたが、相互的な連絡はなかったようである。次のように記されている。

昭和24年11月岸和田市立城内小学校での研究会を機会に、自主的な研究を推進するための機関の準備会的な役割をする討議会が持たれた。

そのメンバーは、大阪府の各地区の代表者であり、その席上、そういう期間または団体というものは必要であることが確認され、出席の代表者は、各地区の指導主事と相談の上、自主的研究団体を結成することを申し合わせた。大阪府としては実験学校的性格を持つ研究団体が誕生するのも間近く、結成された後の活躍を期待してほしい。

### (4) 和歌山県

「和歌山県の実験学校」として次のように記されている。

本県の実験学校は、その出発において、近畿実験学校との協力を直接の目標に取り上げたものではない。しかし各郡市の学校はそれぞれの地域に即し

た教育計画を持って、お互いに協同研究にいきなり、着実な歩を進めている。

#### (5) 兵庫県

「兵庫県教育共同研究会」として会の性格を次のように規定している。

新教育共同研究会は、兵庫県の新教育の向上を目指して発足された民主的な進歩的な学校によって組織されたものである。その要項は次の通りである。

- 1 会の成立は、広く全県下の小学校に呼びかけて、その自由な参加によった。
- 2 会の名義、会則、運営はすべて民主的な協議によって行われた。
- 3 発足時は30校程度であったが、漸次希望の学校が増加して、現在55校になっている。
- 4 予想外に多数の参加を得たので、地域的に6支部（神戸、阪神、東播、中播、西播、北部）を作り、支部としての地域的な活動を図った。
- 5 会は自由な研究的団体であるが、県指導課・県教育研究所との連絡を十分に取った。

#### (6) 奈良県

奈良県内での活動については新教育の影響は、中学校、高等学校教育にまで至った。

昭和22年に「奈良県実験学校」が設立され、奈良女子大学附属小学校を中心として民主教育の普及に向かった。5月29日、30日に、「近畿実験学校、奈良県実験学校協議会」を開き、次の7項目の研究主題を示し、県下の各学校に対して、自校に適するものを選択させた。

- 1 学校経営の民主化
- 2 教育環境の整備運営
- 3 社会教育・地域中心教育
- 4 健康教育
- 5 教育方法
- 6 個性調査ならびに成績考査
- 7 社会科および自由研究の指導法

その研究成果について、2学期から3学期にかけて各郡市内で発表、さらに各郡市内で1校が全県的に発表することになり、主題ごとに1校の優秀校を選んだ。

第2年目（昭和23年度）は、前年度のやり方を踏襲した。7つの主題は同じだが、解釈を自由にしたので、「教育方法」が「学習指導法」に改められたりした。

第3年目（昭和24年度）は、一部に変更があった。前年度の反省から、直接指定する「指定実験学校」と、自主的に研究を進めていく「一般実験学校」に分け、便宜上、前者を「実験学校」、後者を「研究学校」と称することにした。「指定実験学校」は、次の構成で進行した。

指定委員－教育委員会から依頼した。下程勇吉（京都大学）、重松鷹泰・小川正通・中西 昇（奈良女子大学）、松本喜一郎・佐伯正一（奈良学芸大学）、富永敦太（天理図書館）

研究主題および指定校

幼稚園の部

「音楽指導の方法」－郡山幼稚園、「遊具の活用」－晩成幼稚園

小学校の部

「コアカリキュラムの運営」－高田小学校、「体育の生活化」－野原小学校、「複式教育」－向渕小学校、「社会科の実践」－上市小学校、「学習用具の利用法」－朝和小学校、「校外生活の指導」－奈良市飛鳥小学校

中学校の部

「コアカリキュラムの実践」－御所中学校、「職業指導」－伏見中学校、「生活指導」－田原本中学校、「学校図書館運営」－真菅中学校

高等学校の部

「総合コースの実践－特に農業コース」－田原本高校、「ホームルームの運営」－畝傍高校

以上の14項を指定して、「奈良県として特に必要な研究課題から取り上げ、実験結果がよければ、直ちに他校でとりいれるようにする」という方針をとっ

ていた。また、「取り上げる主題は、全教育の中にいかに位置し、いかにあるべきかを深く研究する」ことをねらった。特に留意されたことは、「片寄った教育をして児童生徒を犠牲にするようなことを絶対に避ける」ことであった。

以上のように、近畿の各府県によって取り組み方の違いはあるが、各府県の実験校を中心として、新しい教育の試みが広まって行ったのであった。

次号に続く

#### 註

- 1) 奈良女子大学附属小学校 学習研究会編『学習研究』第16号 1948 巻末『奈良だより』より
- 2) 近畿新教育実験学校協会編『実験学校』第3集 1950 p.3 横山ひろみ『第二次世界大戦直後の「近畿新教育実験学校協会」の活動と成果(1)』p.83において引用。ラングレー氏は、教育の基礎的要素として7主題を挙げた。1 よく家庭の成員になること, 2 基礎学力に精通すること, 3 身体的および精神的健康, 4 余暇の有益なる利用, 5 職業の熟達と適応, 6 良識ある市民としての参加, 7 倫理性の発展, である。
- 3) 『実験学校』第3集 1950 p.52
- 4) 『実験学校』第2集 1949 p.p.59~62
- 5) 横山ひろみ『第二次世界大戦直後の「近畿新教育実験学校協会」の活動と成果(1)』神戸親和女子大学研究論叢第36号 2003 p.71
- 6) 『実験学校』第3集 巻頭, 『第二次世界大戦直後の「近畿新教育実験学校協会」の活動と成果(2)』神戸親和女子大学研究論叢第37号 2004 p.p.107~112
- 7) 『第二次世界大戦直後の「近畿新教育実験学校協会」の活動と成果(1)』p.82
- 8) 『実験学校』第3集 p.63

#### Abstract

In the midst of the ruins immediately after the Second World War, the Kinki New Education Try-out School Association was one of the pioneers which initiated new theories and practices of education for children. I study here its activities and results.